

# 『ぬれほとけ』の「修行」と「知恵」

— 上・中巻の教訓を支える考え方 —

松 浦 恵 子

整理し、「修行」の語が用いられている道歌のうち、拙稿2で解釈を保留していたものを読み解くこととする。

拙稿2と同様、作品全体を場面や教訓の内容によって分割した構成表に基づき、出家と吉野の問答の要点を整理しつつ読み進めていく。拙稿2と重複するが、構成表と「修行」の語が用いられている道歌九首を次に掲げる。

## 作品全体の構成

番号	巻	影印該讀該善行 活字本該讀該善行	始めの一文節 終わりの一文節	内 容
1	上	28 3 1 5 1 29	天は、 まなびたまふし。	序文
2	上	30 7 1 1 1 11 1 3 10 3	うとふも、 見へにけり。	平金登場・大心学者との邂逅
3	上	31 11 1 3 1 19 1 11	しげらく、 おもわる、。	大心学者と平金の論争

本稿は、「ぬれほとけ」の「心鏡」<sup>(註1)</sup>及び「ぬれほとけ」の「修行」<sup>(註2)</sup>— 上・中巻における教義問答の内実 — の統稿である。拙稿1・2の検討を通して、筆者は次のようなことを明らかにしてきた。上・中巻で説かれている「修行」とは、自らを顧慮する姿勢をもって、元來善悪を備えている人間の心を「心鏡」に映し出し、常に心を善に保つように努めることである。上・中巻で吉野が平金に対して説いている教訓は、主に日常生活で心がけるべき事柄であると言えよう。

本作品は、上・中巻で吉野が平金に述べる教訓の内容を、下巻における出家と吉野の問答に示される教義が支えるという構成をとっている。上・中巻での吉野の発言がどのような考えに基づいているのかを考察するため、本稿では、下巻における出家と吉野の問答を

12	11	10	9	8	7	6	5	4
中	中	中	中	上	上	上	上	上
44 50 12 10 47 59 10 3 ／	43 47 7 2 44 50 11 10 ／	42 44 10 8 43 47 6 2 ／	41 42 8 4 42 44 10 8 ／	39 33 17 11 41 42 7 4 ／	39 33 13 5 39 33 16 11 ／	36 25 17 8 39 33 12 5 ／	36 24 10 6 36 25 16 8 ／	34 19 12 7 36 24 9 6 ／
その時、 あるべし。	さりながら、 申さる。	たま〜、 あらん。	平金、歌なり。 吉野詠歌説明	其時、 のたまふなり。	其時、 のたまひける。	よし野の、 のたまひける。	よし野の、 はなさる。	此事、立入は、 道行
平金の問い(どのように修行すればよいのか)・吉野教訓(理学による修行の勧め)・例話、光陰の流れに無自覚で、老いを直視して恥じる古人の対比・教訓(「今日の上」と思つて、念仏による修行をすべきである)	吉野自身の修行の成果	吉野の教訓(自らを顧慮し、自らの生まれ付きにふさわしい身の処し方をすべきである)例話①「盗人の善への志向、例話②「堅固にうまれ付たるもの」と「色々のかたわもの」の対比	平金の、詠歌についての問い・吉野詠歌説明	吉野の教訓(家職に勤めて修行することの勧め)・吉野、自らの家職についての述懐・吉野詠歌	平金の問い(心を安らかにする方法を示してほしい)	吉野の教訓(全ての悪事の根本となるのは色欲であるから、色欲を節制すべきである)・例話①東に下つた男の恋の顛末	吉野登場	

22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
下	下	下	下	下	下	下	中	中	中
91 170 2 4 92 172 ／	90 167 4 10 91 170 1 3 ／	87 159 17 9 90 167 3 10 ／	85 154 17 8 87 159 16 9 ／	83 149 14 1 85 154 16 8 ／	71 113 14 2 83 146 12	71 111 1 1 71 113 13 2 ／	96 106 66 70 ／	78 95 57 65 ／	60 77 48 56 ／
予が、如此。	平金どの、 めでたけれ。	其時、 かたたる。	其時、 のたまひける。	たましいも、 のたまふ。	人は、 おもしろや。	夢の、 一わらひく。			
跋文	平金の改心・吉野の「過不及」のすすめ	吉野の問い(仏道修行の方法として、自力と他力のどちらがよいか)・出家の答(他力に頼るべきである)	吉野の問い(釈迦やその他の祖師達は、どうして女犯肉食の戒を保つたのか)・出家の答(末世まで「法便」を廢れさせないためである)・出家に対する吉野の皮肉・出家の、紛れ物偽物批判	吉野の問い(後生を安泰にするにはどうすればよいのか)・仏道とは、女性に姪しほしいままに振る舞つてもよいのか)・出家の答(括りに達していれば、身体の穢れは穢れとならず、女色肉食をしてもかまわない)	道歌と、道歌についての平金・吉野問答	道歌前書	いまの世のはやりことば	ろうさい	かたばち

18 執行すれば善はましゆき悪はまたほろぶるものとおもふかなしき

20 修行とは善心まさず悪さへず鏡のおもてとぐとこ、ろへ

22 修行してわが心鏡のくもらずは諸神諸仏のすみかなりけり

38 今の世もまた後の世も修行せば他力をたのみしやくもんをみよ

40 理をつよくたゞ理をつよく修行せよさととりといふも理のうちにあり

41 知恵のなき人を道引修行にはたゞほうべんをかんやうにせよ

71 朝うまれゆふべにしすとこ、ろへば三世修行はこんにちのうへ

72 今日の上と修行をするならば何くるしまん七情の気も

76 すかぬ道只一すじに執行せばげんぜ後生はあんらくぞかし

拙稿2で扱わなかつた道歌は三十八番・四十番・四十一番である。

これらの道歌に含まれている「修行」以外の概念語句は、三十八番「後の世」・「他力」・「しやくもん」、四十番「理」、四十一番「知恵」・「ほうべん」である。三十八番の概念語句はブロック20に、四十一番の概念語句はブロック19に用例がある。読者が本文を読む際には順を追って解釈するのが普通であるから、本稿ではブロック18から19の内容の整理と、概念語句の用法の検討を行う。そしてその結果を基に道歌四十一番を解釈する。更に、四十一番で表された考えが、上・中巻のどの部分の記述を支えているのか、その対応を示

すこととする。

本稿で検討を保留するブロック20は、「自力」「他力」「本門」「迹門」の語句によつて論が展開されている。この部分を整理することで、道歌三十八番・四十番の解釈が可能になると思われる。ブロック20に出てくる概念を定義すること、そしてそれらの概念が「修行」とどのように関わっているのかを明らかにすることは、次稿以降の課題とする。

## 二

出家と吉野の問答は、構成表ブロック18から始まる。

### 【引用一】

「(本文欠)たましいもたへはて、事あさましくなさげなく、身の置所のあらざれば、いかゞはせんとあんじしが、「いやましてしばわが心、年久しくあいなれし御出家のましませば、是をたのみ奉り、後生をたづね申さん」と、御出家に対面し、わが身申あげけるは、「それ御出家と申するは、女ほん・にくじきなされずして、物の命をとりたまわず、ぢひ第一にしたまふよしうけたまわり候へしが、そさまになたる御事にや、其御心得すこしもなく、此さんやへ出たまい、われらのごとき賤の女と御ちなみはふしんなり。さりながら、仏道はみだりにさほうなされてもくるしからず候や。日比なさげのしるしには、成仏

いたしまいらする御す、めの候なら御しめしたまはれ」と、なみだをながし申ける。(一四九〜一五〇頁／八三〜八四頁)

原本では、このプロックの直前で本文が三丁分欠落している。そのため、吉野が「たましいもたへはて、事あさましくなさげなく、身の置所」のない状態に陥ってしまった経緯はわからない。しかし、吉野がなぜこのような状態にあつたのかということは、彼女の様子が「事あさましく」と表現されていることから推測が可能である。

「あさまし」という語は、拙稿1・2で検討した箇所に複数の用例がある。

#### 【用例】

①ぬすみ・がうどうして世をらくにわたるものは、是よき事とおもふべき事なれども、更によき事とおもわず、世間をすなわにわたる人をうらやみ、善心をのぞむなり。それほど悪をきらい善をこのむ物を、おのれ（注5）が身の内にもちながら、よき道にいたらざらん事をのぞまざるは、世にあさましき事なり。

(プロック10、四五頁／四二頁)

②心安き事のやうに見へて、なりがたき事とみへたり。わが身生国はかずさのものにて、親は元来百性にて、いとまずしきものなるゆへ、我が身を此さんやへうりすて侍べりし。其本いやしき物なれば、上人下人にあいまして、物いふすべもしらざりし野人の内の野人にて、世にあさましきわれなれど、(プロック

ク11、四七頁／四三頁)

③今の世の人は、上人下人、賤の男賤の女にいたるまで、くわうあんのいとまなきに心をとめず、いづれも若やうにおもひ、老をはじず、身をかへり見る人、かりにもなし。誠にあさましく、おろかにこそ見へ侍べれ。(プロック12、五七〜五八頁／

四七頁)

④には、「ぬすみ・がうどうして世をらくにわたるもの」が、本当は心を善に保つて生きていきたいのに、自らの心の弱さのために悪から脱することができずにいることを表す語として用いられている（注5）。また②では、吉野が「其本いやしき物なれば、上人下人にあいまして、物いふすべもしらざりし野人の内の野人にて、世にあさましきわれ」であつたと言い、太夫になる以前の、「心鏡」を備えず悟りに到達していない自分自身の形容として用いられている（注5）。

③では、「今の世の人」が自らの老いを直視せず、心を迷わせていることを「あさまし」と表現している。これらの用例を総合すると、「あさまし」という語は、迷いの内にあることを嘆かわしく感じていられる際に用いられていることがわかる。迷いの内にあるということは、色欲にとらわれてしまっているということである。プロック18における吉野は、色欲にとらわれ、「ほうぎよのいちぐらに入」って迷いの只中に在るために、「たましいもたへはて」、「身の置所」がないほどの苦しみに七転八倒している状況と推測される。

迷い苦しむなかで、吉野は「いやましてはわが心、年久しくあいなれし御出家のましますは、是をたのみ奉り、後生をたづね申さん」と、長年の馴染み客に僧侶のいることを思い起こし、彼にすがつてこの迷いを脱し、後生を願おうと思ひ立つ。しかしこの僧侶は、僧侶としての「其御心得すしもなく」、吉原に出入りして遊女と縁を結ぶ破戒坊主である。僧侶というものは「女ほん・にくじき」や殺生をせず、「ちひ」を「第一」にするものだというのが世間の人々から期待される姿であるが、吉野が身近に知る僧侶はそうでない。そこで吉野は、「われらのごとき賤の女と御ちなみはふしんなり」と出家が山谷で遊興に耽つていふことに不審を投げかけ、更に、「さりながら、仏道はみだりにさほうなされてもくるしからず候や」、すなわち仏道というものは、女色に姪し、ほしのままに振る舞つてもかまわないものなのかと尋ねるのである。しかしまた一方で、吉野は眼前の出家が、色欲を何らかの方法で処理し、「成仏」に至る方法を心得ているのではないかという期待を抱き、「成仏いたしまいらする御す、めの候なら御しめしたまはれ」と出家に問うのである。

吉野の疑問に対し、出家は次のように応答する。出家の教えは、内容に応じて①③の部分に分けることができる。

### 【引用二】

〔前略〕此愚僧が身のうへのふしん、段々尤なり。それ凡夫の

心よりはからいて見る時は、そのふしんまことなり。①【方一寸の所にたちかへつて自己一体の月と見て見性する時は、心は体なし、かたちなし。なきかとおもへば、其物々のなり・すがたへみちわたり、万物の道理をつとむる事、是また妙なり。心を物にたとへていふ時は、こんがうのせうたいともすいせうの玉のごとくにして、土中にうづみ、水に入、どろげ・すいぶんとの中、鳥るい・ちくるいはらわたの内へ入おきても色のへんずるといふ事なく、とりあげ見れば、よくとぎたてたる鏡のごとくにして、かげ・さわりなし。是を心といふなり。】②【また物の道理をよくいふて、そのしやべつをわけてしらするものは、意念といふて知恵の根本なり。其知恵、眼・耳・鼻・舌・身・七情の氣、本心微妙の所をくわしくいふ時は、意念・心鏡一体になりてくもりなく、こんがうのせうたいともすいせうの玉のごとし。意念悪にへんずる時は心鏡悉くもらせ、其物の色・品に心をなづみ、あれにとりつきこれにしみかぶり、心とらる、時は、万物にうたがいお、く、ふしんたつ心を、ほんぶのまよひといふなり。【ちへは八尺のくわんぬきとなりて、実門のとちてひらきがたし。ちへはあしきものなれば、知恵をすてよ】とのたまふ。【ちへをすてよ】とのたまふもまた【ちへなれば、むく、さらに【ちへ】のあしきにはあらず。【ちへなくしては儒釈道の修行調べべきや。【ちへをすてよ】

とのたもふは、**悪知**をさりて**本知**になれといふ事なり。**本知**  
**悪知**の二つを物にたとへていふ時は、ぬす人の**ちへ**にては大禪  
知識をもだまし奉るほどの**知恵**なれども、よき所の**ちへ**はす  
こしもはたらかずして、ついには身をうしのふなり。是を**あ**  
**くち**といふ。知識の**知恵**は正直あきらかなるゆへ、ぬす人のい  
ふ事をまこと、おほしめしたまされたまふ事、世におろかに見  
ゆれども、**本知**そなわたりたまふゆへ、三世浄土をさとりたま  
ふなり。是を**本知**といふなり。上人下人、老若男女、出家侍民百  
性等にいたるまで、**本知**にいたる時は、心はこんがうのせう  
たいとも、すいせうりんとも、ときあげたる**かゞみの面て**の  
ごとくとなり、万物にかけ・さわりなき所なり。③【其所に  
至ては、女ほん・にくじきに身をけがしても、心のけがる、と  
いふ事すこしもなければ、破開をして破開にあらず。まだまだよ  
ひの心ある内は、女ほん・にくじきは扱おき、五百かいをたも  
ちたまふとも、其五百かい四万九千のほんのふとなりて、成仏  
せん事おもひよらず。元来父母のほんのふのその一滴の水にて  
出来たる衆生なれば、けのさき・つめのさき・ほねのよまで  
も、ほんのふ・にくじきのけがれみちわたりたることなれば、  
なにときよめたりともきよめがたきは体なり。故に唯一神道に  
も体のけがれをばけがれとはいわず、心のけがれをまことのけ  
がれといふてかたくいまいましむる事、至極の道理なり。如此見ひ

らき見性する時は、かみをそり、ほうゑをちやくし、そさまの  
やうなるいつくしき御かたにぬれかけ、魚鳥くだされてもすこ  
しもくるしからず候。『ばんじはたのむ身はこひごろもきてあ  
りわらのむかしこいしや』とかたばちにうたい申候。』是にて  
はいよ／＼とくしんなされよ』とのたまふ。(一五〇―一五四  
頁／八四―八五頁)

部分①では、「心」とはどのようなものかということが説明  
されている。「自己一体の月と見て見性する時」、「心」は形のない  
ものとなる。<sup>(註9)</sup>ところが、形がないかと思えば、様々な物の形や姿  
の隅々にまで行きわたり、「万物の道理をつと」めたりもするので  
ある。「万物の道理をつとむる事、是また妙なり」とある通り、変  
幻自在の「心」の様子は「妙」という語でも表現することができ  
る。更に「心を物にたとへていふ」と、「こんがうのせうたい」す  
いせうの玉」のようなものであり、どのような状況下に置いても  
「色のへんずるといふ事なく」、「よくとぎたてたる鏡」のように「か  
げ・さわり」がない。悟りに到達した心が「よくとぎたてたる鏡」  
に喩えられることについては、既に指摘した。<sup>(註11)</sup>

続く②の部分では、「また物の道理をよくいふて、そのしやべつ  
をわけてしらするものは、意念といふて知恵の根本なり。」と述べ  
て、「心」が悟りに到達する際、どのような作用が働いているのか  
ということの説明する。「物の道理」を「しやべつ」するのは、「意

「念」の働きであると言ふ。「意念」が正しく働いている時は「意念」は「心鏡」と一体になり、心は「こんがうのせうたい」や「すいせうの玉」のようになり、迷いはなくなる。しかし「意念」が「悪にへんずる時」は、様々なものに心をとらわれてしまい、「ほんぶのまよひ」となってしまう。迷いの内に陥らずにすむかどうかは、ひとえに「意念」が正しく働くかどうかにかかっているのである。(注12)

「意念」とは「知恵の根本」であると出家は述べているが、「意念」とはどのようなものの「根本」であるのか、すなわち「知恵」とは一体どのようなものなのかということを示すために、続けて「知恵」についての説明を始めている。

まず「ちへは八尺のくわんぬきとなりて、実門のとちてひらきがたし。ちへはあしきものなれば、知恵をすてよ」とのたまふ」と述べている。この部分は、ある人物の言説が引用されたもの、しかもその人物とは敬意を払われるべき人であろうことが、「のたまふ」という尊敬語が用いられていることから考えられる。少し後の箇所にも「ぬす人のいふ事をまこと、おほしめしだまされたまふ事、(中略)本知そなわりたまふゆへ、三世浄土をさとりたまふなり」と尊敬の表現が見られるので、この箇所は主体である「知識」、つまり「大禅知識」がその人物であろうかと思われる。「大禅知識」とは、高い徳を備えた僧のことである。出家は、「大禅知識」は「知恵」を捨てよと説くが、それは「知恵」に基づいて判断したこと

あり、その時の心は「むく」、つまり穢れていない状態であって、決して「ちへ」が悪いのではないと説明する。

この部分では、「知恵(または「ちへ」)という語が、一つの意味だけで使われているわけではないことが窺え、それぞれの「知恵」がどのような事柄を表しているのかを確定しなければ正確に解釈することができない。「ちへをすてよとのたまふもまたちへなれば」という記述からは、「知恵」の中には、捨てなければならぬとされる「知恵」と、捨てなければならぬという判断を下す「知恵」との二種類あることがわかる。続けて「ちへをすてよ」のたまふは、悪知をさりて、本知になれといふ事なり。」とあるので、「知恵」には「悪知」と「本知」の二つあることが示される。「悪知」とは、「ぬす人のちへ」であり、「大禅知識」つまり高い徳を備えた僧をも騙してしまったり、「ついに身をうし」なわせ、身を破滅に追いやってしまうような悪知恵を指す。具体的には、自分の利益のために他人を騙そうとしたり、保身のためにその場限りの言動をとろうとしたりする考えのことであろう。一方、「本知」とは「正直あきらか」な知恵である。「悪知」の説明にある嘘えと対応させて言えば、盗人に騙されてしまう高僧が備えている知恵ということになる。「正直あきらか」な知恵は「悪知」によって簡単に騙されてしまうために、一見「おろか」なように思われるが、「三世浄土をさと」るために必要なはむしろこちらだと述べ

ている。「本知」を備えていることは、疑うことを知らない、純粹な心を持つていることだと考えてよいだろう。「上人下人、老若男女、出家侍民百姓等にいたるまで」「身分や年齢・性別にかかわらずどのような人であつても、「本知」に到達する時、「心」は「ときあげたるかゞみの面て」のようになる。つまり「本知」を備えていることは、人を疑わない純粹な心を持ち、「三世浄土をさと」つている状態なのである。これはまさに「心鏡」と同義である。

続く③の部分で、出家は、「心鏡」さえ保つていれば「女ほん・にくじきに身をけがしても、心のけがる、といふ事すこしもなければ、破開をして破開にあらず」と述べて、身の穢れは本質的な穢れではないことを説く。(注14)心を清く保つという前提が守られるならば、「仏道はみだりにさほうなされても」かまわない。つまり女色に姪しほしいままに振る舞つても、その行為は許容されることになるのだ。

このブロックに示された考え方は、道歌十六番・六十番・六十一番に反映している。

16 あさましき **知恵** にてほとけ聖人のおしへうたがふ人ぞつたなき

60 人間の **知恵** を仏とおもふなよいきたるもの、**知恵** のうわもり

61 人間の **知恵** を仏とおもふなとおしゆる物ぞほとけなりけり

六十一番は、「大禪知識」が「本知」に基づいて「悪知」を捨てるように説いたということと重ねられることから、「人間の知恵」

を「仏」の知恵であると思つてはいけないと教える知恵こそが「本知」なのだ、という意味である。「仏」の知恵とは「本知」のことであるから、それと対照させてある「人間の知恵」は「悪知」とも言い換えられる。六十一番と同じく六十番にも「人間の知恵」という語が用いられていることから、六十番は、「人間の知恵」を「本知」と思つてはいけない、「人間の知恵」とは所詮「悪知」を積み重ねたものにすぎないのだ、と解釈できる。十六番の「あさましき知恵」とは「人間の知恵」、すなわち「悪知」の言い換えと考えられるので、「悪知」によつて「ほとけ聖人のおしへ」を疑う人はまったく愚かなものだ、と理解することができる。いずれの道歌も、浅はかな人間の知恵を捨てるべきことを説いている。

### 三

しかし、出家の説明の通りであるなら、釈迦を初めとして多くの偉大な先師達が女犯・肉食などの戒律を保ち、身の穢れとなるものを遠ざけようとしてきたのは何故なのか、そもそも戒律が存在してきたことの意義はどこにあるのかという疑問が生ずる。悟つていならば、それらの戒律は保たずともよい筈だからだ。この点についての問答がブロック19で展開される。

#### 【引用四】(ブロック19)

其時わが身申候は、「さやうの道理ならば、仏法根元の釈迦如

来、其末々の祖師達は、なにとて女ほん・にくじき・かいもんを御たもちたまふや。たゞし皆まよひの人にて候や」。出家こたへて、「尤のふしんなり。夫仏道のかんもんは、第一に**法便**をかんやういたすなり。女ほん・にくじきをたもち、其外に

いましめお・きは、それ人がいく千万ありといへども、本心たゞしきものまれなるゆへ、体をいましめ、体より心をろくにけがさぬためのぎやうりつなり。末世まで**ほうべん**のすたらずたてたまわんために、身をすて、かいもん・女ほん・にくじきをたもち、衆生をすくひたまわんと**ほうべん**なれば、誠にありがたき事、たとへてもたとへがたきゆへ、人がをはなれたまふ事なりとて人弗とかいて仏とよみ、名付奉るなり。是にて合点なされよ」。(一五四―一五七頁／八五―八六頁)

出家は吉野の疑問を「尤のふしん」であると認め、応答する。仏道に多くの戒律が備わっているのは、「本心たゞしきものまれなるゆへ、体をいましめ、体より心をろくにけがさぬためのぎやうりつ」であるからだと言う。正しい道を守り通せる強さを持った人間ばかりではないので、心を安らかに、また穢れのない状態に保つため、まず身体を穢れから遠ざけようとする。その工夫として戒律は存在しているのである。正しい道を守り通せる人間ならば、戒律を保つ必要はない。「釈迦如来」や「祖師達」は悟りの域に達していたので、彼等に戒律は必要でなかった。それでも先師達が敢えて「身を

すて、かいもん・女ほん・にくじきをたも」つたのは、「末世までほうべんのすたらずたてたまわんため」であり、そして保たれた「ほうべん」によつて「衆生をすく」うためであった。「ほうべん」とは、多くの人々を仏に近づけるための手段や工夫ということになる。

この説明を聞いた吉野は、「仏法はほうべん第一にして、末世の衆生のためにかいりつ・きやうかいを立たまふとの御事、いよ／＼至極いたし、ありがたく候」(プロック19、一五六頁／八六頁)と納得する。そしてたつた今説かれたことを眼前の出家に投影させてみる。すると、この出家が吉野の前で見せるのは、「さんやへたるみなく」やつて来て、「魚鳥」を食し、「大酒」を飲み、「くぜつ・うらみ・りんきぶかくひかりをくれ、こじやくりにしやくりたまふ事たび／＼」という状態である。また出家の「くだ・おだまき」は、吉野が召し使っている者達からも「一しほあつかましい」と言われるほどである。このような現状を指摘した上で、「すいせうりんのごとくに御心をけがさず、行住ざぐわに修し」ているあなただから問題にはならないのかもしれませんが、と皮肉を込めて、吉野は「すこしもくるしからず候や」と問う。

出家は吉野の問いに対し、次のように答える。

【引用五】(プロック19)

「扱々吉どのは、いづれの道にも、すきまかぞゆるとはその風のごとくなる御ふしんなり。愚僧なが／＼と仏法御はなしいた

し候は、仏よりの御使に、物おほへのつよき小者・中間がまいりたるとおほしめし下され候へ。吉どのになれそめて此かたは、仏やらみだやらよし野どのやら、だれやらかやらわきまへなく、(中略)あまり心うさのま、一首、「君をこひかねのほしさによもすがらなくみばかりに夜こそねられね」など、よみ、夜をあかさすやうなるつたなき愚僧なれば、こんがう・すいせうりんとやらんになり申事は、みろくの出世にもなき事に候。上には衣を着し、出家のやうに見へ候へども、下はなにとも名の付られぬものとおほしめしたまわり候へ。惣じて愚僧ばかりにかざらず、世間をつらく見るに、まぎれ物・にせもの、俗・出家によらずお、き物なり。やき付の金つば、金と見へて下あか々ね、新町ものわん・おしき、かた地と見へてのり地なり。お寺にござるおびくにん、おとこと見えて女なり。われらのごときにせ法師、女ほん・魚鳥のくいたさにながだんぎを申たて、古人のさとりにてなされたる破開のしなをかたりだし、「中かうは一休も破開をなされ候へども、心をけがしたまわねば、破開と見へてはかいでなし、一向宗など見たまへ」と、色々さままく申たて、さとのりの人のなされしをすきうつしによくにせて、道理をつめて申さるれば、正直にしてちへのなき、りちぎにまがふ大ばかのおとこ・おんながこれをき、「さとるといふも是ならん」とほんぶをいよ／＼まよわすも、上は出

家と見ゆれども、下はほんぶのおよばざるしたぬきくれの大めいちん、これにて合点なされよ」とつぶさにこそはのたまひける。(一五七―一五九頁／八六―八七頁)

出家は自ら「こんがう・すいせうりん」のような心を保つ域には達していないこと、自身が「上には衣を着し、出家のやうに見へ候へども、下はなにとも名の付られぬもの」であることを認める。そして、自分と同様、僧侶のなりはしても心を磨かず、いい加減に振る舞っている「にせ法師」が、世の中には数多く見られることを指摘する。「にせ法師」は自らが女犯や肉食を行いたがために、「古人」が悟りに到達した上で「破開」(まじ)を行つたことを語り、一休(まじ)の破戒行為や一向宗で肉食妻帯が認められていることを例に挙げ、「心をけがしたまわねば、破開と見へてはかいでなし、即ち心を穢していなければ、女と交わつてもそれは戒律を破ることにしならないと説く。女性との交渉は、本当に悟っていないければ凡夫の放埒と同じであつて、心を迷いに近づける危険な行為なのだが、「にせ法師」はその点を強調することなく、古の悟り人の行為を「すきうつしによくにせて、道理をつめて」説くのである。そのため「正直にしてちへのなき、りちぎにまがふ大ばかのおとこ・おんな」は、女犯や肉食を放埒たらしめないための大前提である悟りについて十分に知らされず、仏法や悟りを誤って理解してしまうことになる。ここに挙げられているのは、自分の力では仏の教えを咀嚼できず、

教えを噛み砕いて示してくれる先達を必要とする人々である。修行とは本来「ちへなくしては儒釈道の修行調べきや」(引用二)とある通り、知恵を必要とするものであった。仏の教えを自らの力で理解するだけの賢さがなければ、成すことのできないものなのだ。しかし「大ばかのおとこ・おんな」にそのような賢さはない。ただ、教えられることを受け容れる「正直」さ、つまり素直さは備えているので、「にせ法師」は彼等の無知・素直さにつけ込み、仏説を自らの都合のよいように歪曲して説く。「夫仏道のかんもんは、第一に法便をかんやういたす」(引用四)ことは、人々が容易に仏道に入れるよう、その入り際の敷居を低くするということなのだ。この工夫は、人々が仏説を曲解してしまう事態を回避することに繋がる。「ほうべん」は、末世の衆生に仏法が正しく伝えられるために必要なものと考えられている。

このことを道歌として表しているのが、四十一番である。

41 **知恵**のなき人を道引**修行**にはた**ほうべん**をかんやうにせよ  
「知恵のなき人」とは、【引用五】の「正直にしてちへなき、りちにまがふ大ばかのおとこ・おんな」のことを指す。この道歌は「仏の教えを咀嚼するだけの理解力のない人々を悟りに到達させるための修行では、人々に正しく仏法を理解させるための工夫が重要であることを認識し、戒律を守らせることに力を入れよ」と解釈できる。

「ほうべん」の語は、道歌四十二番・六十五番にも見られ、プロッ

ク19の問答と道歌四十一番に示された考えを補足するものと理解できる。

42 **法便**をき、て仏道ねがふ人いつわりかへりまことなりけり

65 **ほうべん**のいつわりきらふ儒道にも二十四孝は**ほうべん**に、る

四十二番は、人々に仏法を正しく理解させるための工夫を聞いて仏道を願うようになった人は、「いつわり」が転じて「まこと」となるように、初めは仏法の本質を見ずに入門しても、後には本當の信心になるものだという意味となる。六十五番は、仏教において仏法を人々に正しく理解させるための工夫が重視されることを、儒学を奉じる立場の人々は便宜的であるとして攻撃するが、儒学における「二十四孝」は、仏教における「ほうべん」と同じ役割を果たすものであり、その点で似ているという意味である。(注18)

#### 四

前節までの検討を踏まえて、プロック18・19の内容をそれぞれまとめてみる。プロック18では、人間の浅はかな知恵である「悪知」とらわれている限り、悟りに到達することはできないので、早くそれを捨てるべきだと説かれ、プロック19では、「修行」には仏の教えを理解する賢さが必要であり、そのような理解力のない者達を導く際には、仏法を正しく理解させるための工夫を重視すべきだと強調されている。

では、これらの考え方は、上・中巻におけるどの言説を支えているのだろうか。上・中巻で「修行」について語られている部分で、知恵と関連する事柄が述べられているのは、次の箇所である。

【引用七】（ブロック12）

その時平金のためふは、「一々段々至極せり。さわい、ながらそれがしは、ようせうのころよりも六法ずきにて候へば、文字書つもおぼへずして、何と修行いたさんや。」よし野の君はきこしめし、「げに尤の御ことわり、儒釈道にかぎらず、文字しらではなりがたし。しかりとは申せども、かうしは天地万物をつまやかに調へて、仁義の五つの文字にて衆生をすくいたまふなり。釈迦は三世浄土を立、あまたの経意をあみたて、ひろきをあつめ調へて、六字のめうがう・妙法の五字につまめて、衆生をばたすけたまふぞありがたや。むかでといふそのむしは、あし百ありてあゆむなり。へびには足はなけれども、其面々の心得にあゆむ道理のそなわれば、むかでの足の百有をへびのうらやむ事ぞなし。六字のめうがう・妙法の五字は、極楽浄土への衆生の足にて候へば、一切経をよみつくし、大学者ありとて、うらやむ事さらになし。（後略）」（五〇〜五二頁／四四〜四五頁）

平金は「文字書つもおぼへずして、何と修行いたさんや」と尋ねる。そしてこれに応答する吉野の言葉に「儒釈道にかぎらず、文字

しらではなりがたし」とあり、「修行」には「文字」を知っていること、つまりそれなりの学力が必要だという認識が表れている。平金は「ようせうのころよりも六法ずき」であったから、真面目に勉学に励んではこなかったのだろう、儒学にしても仏教にしても、その經典を自ら読み理解できるだけの学力を養っておらず、仮に読もうと志したとしても、その内容を理解するのは困難な状態にある。しかし、吉野が語るには、釈迦や孔子は、經典を読まない（読めない）「衆生をばたすけたまふ」方法を準備していた。孔子は仁義礼智信の五つ文字に、釈迦は「六字のめうがう・妙法の五字」に、それぞれ教えを凝縮させて衆生に示しているのである。吉野は、「あし百ありてあゆむ」「むかで」を、足を持たない「へび」が羨むことがないように、学力の無い人もまた、「一切経をよみつくす」「大学者」を「うらやむ」必要は全くなく、その人の身に合った「修行」をすればよいと説いている。

自分一人で「修行」をするには、「知恵」を備えていることが不可欠であるが、自分一人だけの力で「修行」できる人は、世の中にそれほど多くない。六法を踏み、さしたる学力もない平金の姿は、難解な仏の教えを自分一人で咀嚼して身につけることのできない、世の多くの人々の姿を形象化したものと考えられる。平金が身の丈に合った「修行」の方法を会得していく過程はそのまま、「知恵」のない、世の多くの人々が「修行」の手段を理解していく道筋とな

つている。

そしてまた、「修行」に「知恵」を必要とするという考えは、上・中巻に示された「修行」の具体的方法が家職の励行であること、更に「じゆずをつまぐり、かねをたき、念仏申、また座禪してさとりをひらかんと」するような宗教的行為が必ずしも勧められていないこととも関連している。家職に勤めることは、俗世に身を置き、<sup>(註)</sup>学力を以て仏の教えを習得できない人々に可能な「修行」の手段であるからだ。家職の励行は、各人の置かれている社会的立場を肯定した上で、その人の身に合った修行の手段として提示されているのである。

## 五

本稿では、下巻における教義問答を読み説いたが、検討の対象としてはブロック18・19に限定した。下巻の教義問答全てを扱わなかったのは、紙幅の都合もあるが、続くブロック20で扱われるのが「自力」と「他力」の問題、つまり仏法というものをどのように理解しているのかという、本作品の思想的立場に関わる話題であることに拠っている。ブロック20の問答は、本稿で読み解いたブロック18・19に比べて、より抽象性が高く、観念的な問題であるように予想される。

ブロック20で、ブロック18・19よりも抽象性の高い問題が扱われ

ていること、そしてブロック18・19に、上・中巻に示された「修行」を支える考え方が示されていること、この二点を考え合わせると、「修行」を軸とした場合の、本作品の構造が見えてくる。まず上・中巻に、日常生活を送る上で実際に心がけるべき事柄、具体的に何をすればよいのが示される。そして下巻に、上・中巻で示した教訓はどのような考えに基づいているのかということ、また本作品における根本的なものの見方が述べられる。本作品は、いわば表層的な教訓から始まって、段階的に思想の深層部が明らかになっていくという構造をとっているのである。これまで筆者が行ってきた、「修行」の語を中心に据えた検討のうち、拙稿2は表層的な教訓について述べたものであり、本稿はその教訓の根柢となる考え方について明らかにしたものと見えよう。次稿ではブロック20を読み解くが、その検討によって、本作品に示された思想の深層部の様相が解明されると思われる。後考を期したい。

注

1 【国文学叢】第一八三号、広島大学国語国文学会編、二〇〇四年九月。以下拙稿1と略す。

2 【鯉城往来】第七号、広島近世文学研究会編、二〇〇四年二月。以下拙稿2と略す。

3 本稿では、拙稿2で掲げたものより、「内容」の項を簡略化した構成表を掲げている。

4 本文引用は『新編稀書複製会叢書』第二七卷（中村幸彦氏他編、臨川書

店、平成二年)に拠るが、同書に誤りのある箇所については原本に従い、引用に際して注記する。『近世色道論』(日本思想大系第六〇巻、野間光辰氏校注、岩波書店、一九七六年)を適宜参照した。傍線・括弧はすべて筆者による。道歌には通し番号を付し、概念を示す語を四角で囲んでいる。引用箇所は、本文末に〔新編稀書複製会叢書〕該当頁／『近世色道論』該当頁)の形で示した。

5 拙稿2第三節参照。

6 拙稿1第三節参照。

7 拙稿2第二節参照。

8 拙稿2第三節参照。

9 「見性」とは、悟りの境地に到達した状態を表す禅語である。『大灯国師仮名法語』(寛永二年刊)に、「又云、自性本より仏なり。更に仏を求むべからず。自性に生死無し。又生死を厭うべからず。此の如く、仏をも求めず、生死をも厭わざる時、自性本より現れて、百千の日月よりも明なり。是に於て、少し心を注ぎて明め取ることあり、是を見性と名く。実に自性を見ば、直に生死涅槃を越えて、本来の仏にて有るべし。」(引用は、仏教教育宝典⑤「道元・臨濟禪家集」へ昭和四十七年、玉川大学出版部)に拠る。語句の四角囲みは引用者による。とあるほか、「聖一國師仮名法語」(正保三年刊)、「大応國師法語」(正保三年刊)、「永平開山道元和尚仮名法語」(明暦三年刊)など、禪の法語類に用例が見られる。

10 「妙」の語は、作品中、プロック18の他、プロック9・17に用例があり、「本因妙」「本果妙」という語や陰陽説を説明する際に使われている。このことから、「妙」は概念語句として扱うのが適切と思われる。この語についての検討は別稿に譲る。

11 拙稿1第三節参照。

12 拙稿1第三節参照。

13 通常は「善知識」と書かれることが多い。禪の法語などでも「善知識」の用字が一般的である。野間氏は『近世色道論』八五頁の注に「善知識」は「善知識」の誤り。」と記しているが、注9で示したように、この付近の文脈に禪語が用いられていることを考慮すれば、「大善知識」は禪宗の僧侶を想定しての用字であるかもしれない。

14 拙稿1第四節参照。

15 『近世色道論』八六頁注に、中巻「いまの世のはやりことば」の項にある「一 ひかりをくる」とは何とした事なるや。すこしの事にもかたな・わざざぬきひらめかすれば、いなづまのごとくにひか〜といひたし申ゆへ、さやうなるものを、ひかりをくる、と申候。また、言葉にて人をおどし申も、ひかりをくる、と申侍べるなり」という箇所を参看すべきことが示されている。

16 「破開」という語について、野間氏は『近世色道論』八五頁注で「破戒」の誤り。」としている。管見の限り、辞書や同時代の作品中に、「破開」の語形での用例は見出せない。「開」の一字に限れば、「あらばち」という語に「新開」の用字があり、さらに『角川古語大辞典』によれば「あらばちを破る」という慣用表現もある。これらのことから、「破開」の語義は「開を破ること」、つまり「女と交わること」と認定できると思われる。

17 一休が女犯の戒を破っていたと認識されていたことは、『狂雲集』(寛永一九年刊)中の、妓女や森侍者との交情を描いた詩、また「休諸国物語」(寛文末頃刊)巻中第三「休に御ないはうありし事」の記事のあることから窺える。肉食(魚食)については「一休ばなし」(寛文八年刊)巻之一第一「一休和高いとけなき時旦那とはむれ問答の事」、同巻第二「同師の坊につかへて鯉をくひ給ふ事」、同巻第八「同詩歌を作りて蛸をくひ給ふ事 付吐きやくの事」などに見られる。

18 近世初期に「二十四孝」が広く読まれたことについては、母利司朗氏

「全相二十四孝詩選」考——日本近世における「二十四孝」享受史の諸問題（『東海近世』第四号、東海近世文学会編、一九九一年九月）、同「江戸版『二十四孝』の成立」（『東海近世』第一一号、東海近世文学会編、二〇〇〇年五月）などに詳しい。  
19 拙稿「第二節参照」。

——まつうら・けいこ、近畿大学附属福岡高等学校常勤講師——